

昭和47年 年度代表馬

イシノヒカルに輝く



本誌の新企画として、年度代表馬および各最優秀馬を選出することにしました。選出は、関東・関西の報道関係者、評論家78名の投票により、東西の票のアンバランスなどを是正するため、実行委員会を設けました。投票委員、実行委員の御協力を感謝いたします。

(編集部)

- ☆年度代表馬  
イシノヒカル
- ☆最優秀3歳馬(牡)  
レッドイーグル
- ☆最優秀3歳馬(牝)  
キシウローレル
- ☆最優秀4歳馬(牡)  
イシノヒカル
- ☆最優秀4歳馬(牝)  
アチーブスター  
トクザクラ
- ☆最優秀古馬(牡)  
ヤマニンウエーブ
- ☆最優秀古馬(牝)  
ジョセツ
- ☆最優秀障害馬  
ムーテイイチ
- ☆最優秀アラブ  
ジャズ

イシノ三強を追いこむ

競馬は一年を単位として、画然と区分される。年が明ければ三歳馬は四歳となり、四歳は古馬と呼ばれるようになる。そして、一年を顧みるとき、四歳五大クラシックを争った馬たち、あるいは天皇賞・有馬記念のヒーローたちが、鮮かに蘇えって来る。一方、三歳でデビューした若馬の中から、新星として光彩を放つ馬も出現する。競馬人にとって、一年はそのまま馬たちの思い出につながる。昭和四十七年の年度代表馬は、イシノヒカルに決定した。同馬は三歳から四歳春にかけて四連勝、インフルエンザで立遅れた関東馬のなかでは、クラシックのシーズンを迎え最有力候補とみられるに至った。

しかし、この時期は、関西勢の旗色が断然関東に勝っていた。阪神三歳ステークスを圧倒したヒデハヤテ(タマナーワカシラオキ)は、四歳になっても快調を誇っており、中京のオープン、きさらぎ賞を連覇して早々に東上、三月の京成杯でもランドプリンス以下に快勝した。このヒデハヤテに、スプリングステークスで土をつけたのがタイテエム(セントクレスピニシールド)であった。タイテエムは三歳時は3戦1勝、十月はじめから三カ月余の休養をし、三月半ばから再び出走して阪神のさわらび賞、山吹賞を勝ち取り、スプリングSに駒を進めた。

無難、人気はヒデハヤテが大半を集めるほど断然たるものであったが、三コナーから先手をとったタイテエムが、ついにヒデハヤテの追走をおさえて優勝し、関西の層の厚さをみせつけると同時に、流感の影響の大きさを改めて感じさせた。

選出の方法

1. 選出に当たっては、まず、関東・関西の日刊記者クラブ、民放記者クラブ、専門紙協会の代表各1名、計6名の委員により構成される実行委員会を設けた。
2. 実行委員会は、投票を行なう報道関係者・評論家を経験年数などにより選定する。その結果、投票委員は関東44名、関西34名の計78名となった。
3. 投票は2頭連記で、筆頭馬は7点、次席馬は3点として集計する。
4. 選出は得点を重視して行なわれるが、得点が接近した場合は実行委員会が評議のうえ決定する。

\*

その一方では、ロングワンの異父弟ロングエース(ハードリドンウインジェスト)が、一戦ごとに力をつけて注目されていた。同馬は一月京都の新馬に勝ち、中京のヒヤシンス賞、フリージア賞を制し、東京のオープンでは強敵ランドプリンスを降して勝った。さらに弥生賞でもランドプリンスに2馬身の差をつけて完勝、これで土つかず五連勝の記録、関西でも筆頭とみられるようになった。ランドプリンス(テスコボーイニユウパワ)は、三歳以来弥生賞まで13戦5勝。四歳になってからは、呉竹賞、ニューイヤールC、オープン、さざんか賞を四連覇、東上後は京成杯、東京のオープン、弥生賞と二着つづきであるが、その堅実な成績は無気味なものに感じられた。



☆昭和47年度代表馬 最優秀四歳馬(牡)

## イシノヒカル

牡 鹿毛 昭和44年5月6日生

父マロツト  
母キヨツバメ

馬主 石嶋清仁, 調教師 浅野武志(東京), 生産者 北海道門別町 荒木牧場

### 《競走成績》

三歳時5戦2勝 5,252,600円

四歳時9戦5勝 92,298,200円

菊花賞=京都3000<sup>円</sup>, 有馬記念=中山2500<sup>円</sup>



☆最優秀三歳馬(牡)

## レッドイーグル

鹿毛 昭和45年6月2日生

父サウンドトラック  
母ピースケツブ

馬主 千屋レッド牧場KK 調教師 鈴木清(中山), 生産者 北海道浦河町 吉田 実

### 《競走成績》

三歳時3戦3勝 17,205,800円

朝日杯三歳S=中山1600<sup>円</sup>



☆最優秀三歳馬(牝)

## キシウローレル

黒鹿毛 昭和45年4月19日生

父ゴールドンパス  
母カネスカイ

馬主 木村善一, 調教師 梅内慶蔵(栗東), 生産者 北海道門別町 浦新栄太郎

### 《競走成績》

三歳時4戦4勝 27,052,000円

デイリー杯三歳S=阪神1400<sup>円</sup> 1:22.2 日本レコード, 阪神三歳S=阪神1600<sup>円</sup>

## 実行委員

大島 輝久  
(東京競馬記者クラブ)

鳥居 滋夫  
(民放競馬記者クラブ)

小畑 正雄  
(日本競馬新聞協会)

千草 伊三郎  
(関西競馬記者クラブ)

阿部 恒也  
(中央競馬関西放送記者クラブ)

野辺 好一  
(関西中央競馬専門紙協会)

戦を演じ、全競馬ファンをうならせた。ハクホオショウウ四着、ランドジャガー五着、そしてイシノヒカルは六着であった。関西馬はやはり関東勢を圧倒していた。

夏を終え、各馬とも菊花賞を目標に整調が進められていた。三強はそろって健在、まず神戸新聞杯で、タイテエム、ランドプリンスがマッチ・レースのような競り合いに終始し一、二着。二〇〇〇分0秒5のレコードで、他馬を大きく引離していた。

タイテエムは、さらに余勢をかって京都新聞杯をも制し、春以上の充実を示した。道悪でタイテエム以上に期待されたランドプリンスはやや不振で四着、ダービー以来の出走となったロングエースは六着であった。

当然、菊花賞の人気は、タイテエムが第一となったが、それほどの開きはなくロングエース、ランドプリンスと続き、関東の旗頭イシノヒカルは五番人気に過ぎなかった。だが、直線、三強が競り合う外から、見事な末脚を伸ばし、タイテエムに快勝した。

## 難航きわめた四歳牝馬

絶好調を誇るタイテエムは、重馬場、外ワクなど悪条件にもかかわらず快走し、ロングエース、ランドプリンスの宿敵に打ち勝ったが、イシノヒカルの強襲に破れたのは不運であった。が菊花賞を境に、イシノヒカルと三強はところを変えたのである。

牡馬にたいして、牝馬の選出は容易でなかった。投票は別掲の方法により行なわれたが、筆頭馬投票はアチーブスターが37票、トクザクラ34票であったが、次席馬投票はトクザクラが多かったため、得点ではトクザクラがアチーブをしのいだ。

実行委員会の役割の一つは、関東・関西の票数のアンバランスが現われた場合、それを是正する点にあったが、今回の票をみると、関東の投票者がただただ関東馬を推挙したり、また関西側が関西馬をひいきするなど

有馬記念にタイテエムの登録はなかった。だが、イシノヒカル、ロングエース、ランドプリンスの四歳上位陣が名を連らねた。古馬以上に彼らの実力は評価されるだけに、例年になく興味深い有馬記念が期待された。残念だったのは、折角東上したランドプリンスが故障のため帰郷してしまったのとロングエースが本調子を欠いてたことだ。

イシノヒカルの素晴らしい勝利であった。古豪メジロアサマに1馬身半の差をつけ、四歳牡馬にして初の有馬記念制覇であった。昭和四十七年は、前半は関西の三強が話題をさらい、後半になってイシノヒカルが追いこみ、ついに自らの年とした。同馬がほとんど満票に近い票を集め、年度代表馬と最優秀四歳馬(牡)の二つのタイトルを獲得したのは、当然といえよう。

いう傾向は、ほとんどといていいほどみられなかった。

実行委員も両馬をめぐり甲論乙駁してつきとるところを知らなかった。アチーブスターのポイントは、春は桜花賞を制覇、秋は準クラシックともいうべき、ビクトリアCの勝利という二つの大きな星である。だが、この二つのレースの間は、凡走また凡走で、入着すらもできず、ファンの期待を裏切っている。こうした馬がはたして最優秀馬の名に値いするであろうか、というのがトクザクラ支持者



☆最優秀四歳馬(牝)

### アチーブスター

黒鹿毛 昭和44年4月15日生

{父シブリアニ  
{母フォーテリング

馬主 山本信行, 調教師 田之上勲(栗東), 生産者 北海道浦河町 笹地牧場

《競走成績》

三歳時6戦0勝 1,625,000円

四歳時15戦4勝 51,412,600円

桜花賞=阪神1600円, ビクトリアC=京都2400円



☆最優秀四歳馬(牝)

### トクザクラ

鹿毛 昭和44年4月13日生

{父パーソロン  
{母トクノコギク

馬主 徳間牧場, 調教師 梶与四松(東京), 生産者 千葉県芝山町 徳間牧場

《競走成績》

三歳時5戦4勝 29,578,200円

京成杯三歳S=中山1200円, 朝日杯三歳S=中山1600円

四歳時5戦3勝 27,228,200円

牝馬東京タイムズ杯=東京1600円, ダービー卿CT=東京1800円



☆最優秀古馬(牡)

### ヤマニンウエーブ

黒鹿毛 昭和42年3月9日生

{父ラヴァンダン  
{母ヤマナミ

馬主 土井宏二, 調教師 中村覚之助(栗東), 生産者 北海道苫小牧市 錦岡牧場

《競走成績》

四歳時13戦2勝 8,674,800円

五歳時13戦4勝 34,450,400円

六歳時14戦4勝 83,134,600円

京都記念=京都2400円, 天皇賞=東京3200円

## 投票委員

《関東》

大島輝久(朝日), 石崎欣一(中日), 乾邦夫(中日), 清水久生(デイリー), 世良和夫(デイリー), 伊藤元彦(フジ), 小宮 晃(報知), 山田信夫(時事), 佐野 剛(毎日), 清水 昇(内外), 小堀孝二(日経), 橋本邦治(日刊スポ), 井上康文(産経), 山中将行(スポニチ), 蔵田 駿(スポニチ), 渡辺高昌(東京), 吉田恒雄(東スポ), 原ただし(東タイ), 新井政文(東タイ), 瀬上保男(読売), 花岡 惇(ヨミウリ), 岡田光一郎(会友), 赤木駿介(サンスポ), 宮城昌康(スポニチ), 渡辺正人(報知), 大川慶二郎(ダービー), 笹川 忠(馬), 所貞夫(勝馬), 蔵田正明(研究), 松尾義範(ダービー), 石川 治(馬), 行方久(日刊), 及川 勉(研究), 二宮徳明(勝馬), 深沢五郎(一馬), 小畑正雄(競友), 村田 治(競週), 宇沢朝夫(新報), 計44名

《関西》

小西行雄(京都新聞), 千草伊三郎(日経), 最上利澄(読売), 矢野和幸(フジ), 安田文雄(大阪), 中淵 勝(関西), 村上賢三(デイリー), 秋本邦弥(報知), 後藤田正人(報知), 梶山隆平(日刊), 尾崎 雅(日刊), 岡部友二(日刊), 浅野 潜(大阪スポ), 内山勝三郎(サンスポ), 古川清蔵(サンスポ), 安部恵一(スポニチ), 中山信義(スポニチ), 谷口秀之(関テレ), 松本暢章(関テレ), 杉本 清(関テレ), 小崎 愷(近畿), 橋本大信(近畿), 阿部恒也(短波), 高木まもる(短波), 高木良三(毎日), 広瀬允昭(毎日), 東条あきら(日刊), 志摩直人(関テレ), 青木公雄(ファン), 坂本日出男(ブック), 千葉耕司(ニホン), 森田恵夫(ニュース), 下浦康生(ダービー), 望月章司(馬), 計34名

## 三歳はすんなりと

の論旨であった。一方のトクザクラは、牝馬にして朝日杯を制したほどの実力馬であるが、桜花賞は四着に敗れ、その後体調をくずし、オークスには出走することもできなかった。しかし、約五カ月の休養をとってカムバックすると、牝馬東タイ杯ではクリケントらに5馬身の差をつけて大楽勝。つづくダービー卿チャレンジトロフィーでも、直線、追われると鋭く伸び、ギャラントモア、ミヨシホマレに2馬身の差をつけて勝った。このレースには万全のコンディションとはいえぬにせよ、春の天皇賞馬ベルワイドも出ていて、重賞競走の顔ぶれとしてまず一流。トクザクラは、それらの面々をこどもなげにねじ伏せた。

三歳の牡レッドイーグル、牝キシユウローレルは得点のとおりで、委員会にもまったく異存はなかった。古馬の牡は、秋の天皇賞馬ヤマニンウエーブに決まったが、メジロアサマの得点もかなり接近していた。すでに七歳、しかも天皇賞

の優勝馬であるアサマは、出走するチャンスも少なく、この年は6戦2勝、AJCカップ、東京のオープンに勝っただけで、宝塚記念は苦手の不良馬場でショウフウミドリに六着、高松宮杯もジョセツの三着、有馬記念も二着と、やや不本意のシーズンに終わった。その

た。結果は惨敗に終わったが、牝馬のナンバワーはこの馬ではないか、とトクザクラ支持者はいう。

一方、アチーブ支持者のいい分は、たしかに桜花賞、ビクトリアを除くと、この馬の成績は芳しくない。だが、日本の競走体系はクラシックを頂点としてつくられている。にもかかわらず、クラシックの優勝馬を尊重しないのはなぜか。いま一頭のクラシック馬タケフキはオークスだけだが、牝馬の菊花賞という趣旨でつくられたビクトリアにも勝って

いる。一六〇〇から二四〇〇に勝っていることも無視できない。それにたいしてトクザクラは一八〇〇までで、牡馬を破ったといっても、一般重賞競走ではないか。このように意見はまっ二つに割れ、どこまで論議をかわしても進展はみられなかった。どちらにも論拠はあった。だが、委員会一致の結論は得られそうにもなく、ついに大島委員の提案で、一着同着ということに収まった。



☆最優秀古馬(牝)

ジ ョ セ ツ

芦毛 昭和42年2月28日生  
 {父シーフユリユー  
 {母セツシユウ  
 馬主 中村勝五郎、調教師 鈴木清(中山)、生産者 千葉県富里村 扶桑牧場  
 《競走成績》  
 四歳時10戦3勝 18,059,000円  
 五歳時13戦5勝 41,653,600円  
 七夕賞=福島1800円、福島大賞典=福島1800円、ダービー卿CT=東京1800円  
 六歳時6戦2勝 44,086,400円  
 目黒記念=中山2500円、高松宮杯=中京2000円



☆最優秀障害馬

ム テ イ イ チ

牝 鹿毛 昭和43年4月12日生  
 {父ムーテイエ  
 {母ペンアサイチ  
 馬主 上田清次郎、調教師 上田武司(栗東)、生産者 北海道浦河町 谷口周一  
 《競走成績》  
 三歳時5戦0勝 1,200,000円  
 四歳時平地13戦2勝 6,014,200円  
 障害5戦4勝 17,008,200円  
 五歳時障害13戦6勝 49,665,800円  
 阪神障害S=阪神3300円、京都大障害=京都3260円



☆最優秀アラブ

アラ ジ ャ ズ

牡 鹿毛 昭和44年4月1日生  
 {父アトモスオー  
 {母系ダイイチタケルヒメ  
 馬主 古川益雄、調教師 高橋直(栗東)、生産者 宮崎県綾町 川上義美  
 《競走成績》  
 三歳時11戦5勝 10,113,400円  
 四歳時12戦4勝 25,997,200円  
 アラブ大賞典=中京1800円、アラブ王冠=新潟2200円、読売C=京都2000円

れでも、実力的にはやはりヤマニンウエーブより上とみた人が多かったもので、これだけ票を集めたのに違いない。が、最優秀馬というには決め手がなかった。

一方、ヤマニンウエーブは、昨年六歳の春までは条件馬に過ぎなかった。したがってクラシックとは無縁の道をたどって来た。しかし、春からは重賞競走に挑戦するようになり、堅実に入着をつづけ、一息入れたあと、秋は朝日チャレンジカップ二着、ハリウッドターフクラブ賞三着のあと、京都記念に勝ち、天皇賞をも拝受した。最優秀古馬(牡)はヤマニンウエーブのものであった。

牝馬のタイトルは、文句なくジョセツのものであった。春は目黒記念、高松宮杯と重賞で最高級の二つのレースに優勝し、秋も緒戦の京王杯オータムハンデで二着、まずまずの滑りだしてハリウッドターフクラブ賞に遠征した。しかし、思わぬ削蹄のミスから脚部に不安が生じ、楽しみにしていた天皇賞、有馬記念に出走することができなかったのは惜しんでもあまりある。

障害馬は投票の結果は、ナスノセイラン、ムーテイイチの順で、得点数は27点、21点とかなりの差があった。だが、これは実行委員会が全員一致の見解でムーテイイチと逆転された。

その理由、票数の多い関東投票者はムーテイイチのレースを見ていない。ムーテイイチは、この年13戦5勝、取得賞金四九、四九〇、〇〇〇円で阪神障害ステークス、京都大障害を制覇している。対するナスノセイランは、9戦3勝で春は中山大障害を二度目の勝利で

飾ったが、ほかには目立った成績はなく、秋の中山大障害は力つきて惨敗、すでに峠を越えた感がなくはない。最優秀という名はムーテイイチの方がふさわしいのではないかと結論された。

アラブもジャズとヒシマツタカが票を分けた。ヒシマツタカは春の読売カップでジャズ

四歳牝馬はアチーブスターとトクザクラの得点が非常に接近している。

大島 問題点はアチーブが桜花賞・ビクトリアCの、四歳牝馬戦に勝ち、トクザクラは牡の古馬に勝った。ここをどう見るかだ。

野地 アチーブはクラシックと、牝の菊花賞といわれるビクトリアに勝ったが、あとの成績にムラがありすぎる。

千草 それがあつて、関西でも東の馬に入れた人があつたはずだ。トクザクラは堅実な成績を残している。

小畑 成績が安定していれば、アチーブで仕方がないところだが……

筆頭票ではアチーブが勝り、次点票でトクザクラ。合計得点はトクザクラが上です。

大島 アチーブの筆頭票は、関西の基礎票を越えている、これは重要だ。

千草 タイトルが強さかということだが、強さならトクザクラが上だ。

大島 が、クラシックのウエートは重い。

小畑 あとどんな成績でも、桜花賞馬なのだからね。

鳥居 アチーブは大レースに2勝したが、あとには着にも入っていない。代表馬というイメージからは遠くなる。トクザクラは体調をくずしても、桜花賞では4着だ。アチーブは負けが惡すぎ

☆☆実行委員会から

に1/4馬身勝っているが、秋は逆にジャズが2分3秒5のレコードで、ヒシマツタカに、1/4差をつけて優勝した。さらに新潟のアラブ王冠でもジャズが勝っていて、ジャズの優位が認められた。

阿部 いや、桜花賞、ビクトリアの勝利は重たい。四歳牝馬の代表なら、四歳牝馬レースに勝つたことを重視したい。

ついに結論が出ず、最後に改めて論議することになった。論議を再開しても、アチーブ、トクザクラを推す委員相譲らず、大島委員より同着説が提案された。

千草 一度同着にすると、それが前例となって、今後も難しくなると、いつも同着ということになりはしないだろうか。

小畑 同着というのは安直すぎないか。

大島 安直ではない。さつきから40分近くも論議しても結論が出ないんだ。これは肉眼では判定できない写真判定なんだ。それでも判定できなくて、引延して引延しても判定できないということだ。

鳥居 競馬にファンがある以上、ファンの期待を裏切り続けて、忘れた頃に勝ったのが大レースであっても……

大島 それもあるだろう。が、桜花賞とビクトリアを勝った馬を落とすには、大変な反対材料が必要だ。決していい加減に同着にしようというのではない。この場合はそれしかないんだ。

小畑 同着でも仕方ないかもしれない。ただ将来、これを逃げ場にしないことが必要だ。